の振興により地方都市の魅力の一つとして都心地域に盛り場性をいかにつけ加えていくかが課題と言えよう。

豪雪地域の地域性に関する地理学的考察

ー新潟県小千谷市を中心としてー

吉田章子

新潟県は全国でも有数の豪雪地域となっているが，その中でも魚沼地方はことに雪深いことで知られており，3～4mの積雪をみることもまれではない。したがって，この地域の住民の冬期の生活は"雪"によって大きく支配されていると言ってよいだろう。つい最近まで，積雪は雪国の交通と産業をマヒさせ，生活を凍結させてきた。日本で雪についての本格的な研究が始まってから，まだ40年少々しかたっておらず，さらに，雪国における冬期の生活マヒを積極的に改善する動きがおこったのはごく最近のことである。そこで，本論文では，雪に対する労力と生活の記録を記すことによって，少しでも豪雪地域の地域性というものを知る手がかりとなすことを目的とした。

研究方法としては，各種文献の他，現地でのフィールド調査および魚沼地方の3つの高校にお願いしたアンケート調査の結果を資料とした。

ひと口に豪雪地域といっても，都市もあれば農山村もあり，積雪の状態も様々で，雪による障害もまた一様ではない。小千谷市においても，市街地では機械力による道路の除雪がすすめられ，流雪溝や消雪パイプ等の消雪設備も整って，冬期でも車輛交通が可能となっている。一方，雪害対策の遅れている山間地域では，今なお道路を開くのは人力による道つけに頼り，様々の生活上の不便を強いられている所が多い。

アンケート調査によれば，住民は雪国を「土地に愛着はあるが住みづらい。」と考えているという結果がでたが，実際，雪がこい，雪堀り，道つけ等にかかる費用や労力は雪国の生活における大きな損失である。その他，産業や交通の面でも，雪は決してプラスの要素となっているとは言えない。

しかし，深い雪の中で冬をすごしてきた豪雪地域における長い歴史は，雪国独得の民俗をつくりあげてきたし，これからも雪が降り続くかぎり，雪は地域住民の冬期の生活の基盤となっていくであろう。

道路除雪，雪おろし，冬期の出稼ぎと，雪による生活の困難さはまだまだ山積みに残されている現在，豪雪地域の住民は，これら克服しなければならない多くの課題と積極的に取り組んでいかなければならないと感じる。

横須賀市における都市化の特徴

和田直子

(1) 目　的

横須賀市は三浦半島の中央部を占める人口40万人の都市である。戦前は一貫して軍都としての道

を歩み，又戦後は米軍の中枢基地が置かれるなど軍事的色彩の濃い都市である。しかし現在では工業も発展し，又宅地の開発が進められベッドタウン化も進行し，かなり以前と様相を異にしてきている。

私は本論文の中で旧海軍，米軍基地，京浜地帯の影響を考えながら，人口動態，就業構造，土地利用の変遷などを指標として，横須賀の都市としての発展の特徴を考察してみた。

(2) 枠　組

第一章ではまず地域の概観を述べ，第二章では都市としての発展段階を次の6期に分け，時代の概観，人口，就業構造，市街地の拡大などについて述べてみた。

第一期　幕末～明治17年
第二期　明治18年～明治40年
第三期　明治41年～大正15年
第四期　昭和元年～昭和20年終戦時
第五期　昭和20年終戦時～昭和35年
第六期　昭和35年～現在

又，第三章では市域を12地区に分けそれぞれの地区の特徴を考察し，第四章をまとめとした。

(3) 結　果

横須賀の都市としての発達は幕末に地形的有利さから幕府の造船所が当時わずか戸数210戸の江戸湾に臨む漁村であった。横須賀村に建設されることになったことから始まる。そして明治17年には横浜にあった東海鎮守府が移され横須賀鎮守府となり，横須賀は東日本の海防の中心地となり都市としての基盤が築かれていった。その後横須賀は軍備の拡大とともに軍都として急速な発展をとげ，明治40年には市制をしいた。横須賀港は第一軍港となり，港の周辺には海軍工廠を中心に様々な施設が設けられ，人口は増加の一途をたどっていった。平地部が少ないため海岸線が埋め立てられ，又，人々の住居地は谷の奥へ奥へと進み樹枝状に伸びて谷戸集落という独特の形態をつくっていった。

昭和に入ると軍の強い要請により横須賀市は周辺の9町村を合併し三浦半島の大部分を占める都市となった。

戦後，敗戦により横須賀市を支えていた日本軍の基地としての役割は失われることになったが，米軍の進駐により軍港や工廠などの施設は米軍に接収され米海軍の基地として再び利用されることになった。そして基地関係の労働者として市民の多くが働くようになり，又，米兵相手の商店や飲食店が繁栄するにつれ，種々の社会問題を含みながらも横須賀は徐々に活気をとり戻していった。

一方，昭和25年には「旧軍港市転換法」が適用され「平和産業港湾都市」の建設が目標づけられ旧軍用地や軍施設が公共用地や工業用地へと転換されていった。しかし，昭和27年には自衛隊が置かれ，防衛都市としての重要性も増していった。

昭和35年以降になると，工業がしだいに発達してゆき昭和50年の工業出荷額は全国で23位であった。一方丘陵部を中心とする宅地の造成も盛んに行われ，特に最近では，横浜・東京のベッドタウンとしての性格を帯びてきている。